AL NEWSLETTER
アクティブラーニングニュースレター
Volume 10, No. 2
October 2024

～ 目次 ～

◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
◆ 『つくって学ぶアクティブラーニング』間もなく刊行（p.1）
◆ 『つくって学ぶアクティブラーニング』座談会(p.2)
◆ 今後の活動予定(p.4)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS、東京大学駒場キャンパス 17 号館 2 階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとりいれる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門（旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設）までお問い合わせください。（若杉）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（若杉）

◆ 『つくって学ぶアクティブラーニング』間もなく刊行

EX 部門では、旧アクティブラーニング部門時代に、書籍『東京大学のアクティブラーニング―教室・オンラインでの授業実施と支援―』（東京大学出版会、2021 年）を刊行しました。人文・社会科学、自然科学、教育手法開発の各分野から 3 つずつ計 9 つの授業を採りあげ、各授業におけるアクティブラーニングに関する試行錯誤を紹介するとともに、KALS を拠点として進められたスタッフ・ティーチングアシスタント（TA）による様々な授業支援の取組みを紹介しました。いわば、授業の「表」の面と「裏」の面の双方を読者に知っていただこうという試みでした。2007 年の KALS 設立と 2010 年の旧アクティブラーニング部門設立からの 10 年以上の取組みをまとめるべく、可能な限り包括的に紹介することに力点を置いていました。

この度、続編となる『つくって学ぶアクティブラーニング』（東京大学出版会、2025 年刊行予定）を刊行する運びとなりました。今回はアクティブラーニングのうち「学生自身がつくって学ぶ」ことに焦点を当てています。仮の目次は下記のとおりです。

はじめに（若杉桂輔、中澤明子）
第 1 章　つくって学ぶアクティブラーニングのデザイン（中澤明子）
第 2 章　教材をつくるⅠ：論文執筆ゼミナールにおけるルーブリック作成（中村長史）
第 3 章　教材をつくるⅡ：シリアスゲームデザイン（標葉靖子）
第 4 章　教材をつくるⅢ：デジタルリテラシーを学ぶオープン教材製作（重田勝介）

第 5 章	教材をつくるⅣ：オープンエデュケーションを学ぶ教材製作（中澤明子）
第 6 章	教材をつくるⅤ：国際紛争ケースブック作成（中村長史）
第 7 章	授業をつくるⅠ：SDGs を学べる授業案設計（中村長史、中澤明子）
第 8 章	授業をつくるⅡ：反転授業作り（福山佑樹）
第 9 章	ワークショップをつくる（町支大祐）
第 10 章	座談会「つくって学ぶアクティブラーニング」のデザイン原則（中澤明子、中村長史、標葉靖子、重田勝介、福山佑樹、町支大祐）

第 1 章では、教育において形成が期待される能力やその育成方法について概観したうえで、学習者中心の学習におけるデザインモデルである「所有・学習・共有（Own it, Learn it, and Share it）」を参考に本書の枠組みを提示しています。すなわち、①何を誰に向けて何のためにつくるのか、②どのようにつくるのか、③つくって学ぶことの効果・利点といった項目です。

第 1 章で示した枠組みを踏まえて、第 2 章から第 6 章までは「学生自身が教材をつくって学ぶ」具体例を計 5 つとりあげ、第 7 章と第 8 章では「学生自身が授業をつくって学ぶ」具体例を計 2 つ、そして第 9 章では「学生自身がワークショップをつくって学ぶ」具体例を紹介しています。いずれの章も汎用性を意識して各自の授業事例を紹介していますので、「つくって学ぶ」という面に着目して異なる学問分野の授業にも目を通していただければと思います。

第 10 章には、「学生自身がつくって学ぶ」授業での工夫や悩みについて事例寄稿者が率直に意見交換をした座談会の模様を収録する予定です。本書で紹介する授業が試行錯誤を重ねた成果であり、今なお改善の途上にあることを感じていただき、ご自身の授業の参考としていただければうれしく思います。

写真：座談会の様子

現在、刊行に向けた最終的な作業をしています。本書が多くの方の目に触れ、「つくって学ぶ」手法がさらに広まる一助となれば幸いです。（中村）

◆『つくって学ぶアクティブラーニング』座談会

第 10 章未収録の内容を紹介します。「つくることで学ぶ」授業を担当する教員はどのような悩みを持ち、対処しているのでしょうか。

つくる段階のサポートや工夫

中澤：学生がつくる段階では、さまざまなサポートが必要だと思います。学生が円滑につくれるように、心掛けていることや工夫をお聞きしたいです。

福山：私の授業では、授業で使用するワークシート類をつくり込むようにしています。時間の都合で手厚く授業設計等に関する理論を教えられないので、動画をつくる前には絵コンテのワークシート、授業をつくる時には授業デザインシートを渡して、それを書いてもらいます。ほかの方の授業より私の授業が恵まれているのは、TA が 2 人いることだと思います。ある程度担当を決めて、書いたシートに基づいてアドバイスを手厚くすることを心掛けています。

重田：私も全く一緒ですね。教材をつくる時に、まず企画書を書いてもらいます。その後に、課題分析図、これはインストラクショナルデザインの考え方で、こういったことを学ばせるために、そのためにはこういうことを学ばないといけない、そのためには事前にこれを学ばないといけないという構造を最初に決めてもらっています。

その 2 つをつくることが、誰向けの教材かとか、どういう学習目標を持っているかということの設計図になるので、まずそれをつくってもらいます。

授業全体の中盤に行うので、そこで骨組みをつくった上で、最終的に教材をつくりましょうと誘導するようにしていますね。

中澤：私も同じです。「SDGs を学べる授業をつくろう」も「オープン教材をつくろう！」の授業も、クラスデザインシートや教材設計書を最初につくります。どちらの授業も、それ以前の授業で手順を伝えています。その手順と同じ項目でワークシートを構造化して、項目に従って順番に記入するようにしています。

また、「オープン教材をつくろう！」の授業では、あえてつくる教材のメディアを決めています。具体的には「スライドやテキストベースの教材」と指定しています。制限を設けることで、学生はその点について検討する必要がなくなるので、時間の短縮や効率化になると考えています。

標葉：私はおそらく、皆さんと対照的だと思います。最初は、シリアスゲームをつくるときに考えるべき要素を穴埋めしていけるワークシートを用意していたのですが、そもそもボードゲームやカードゲームで普段遊んでいない学生が大半のため、かえって混乱してしまうことが多かったので。

むしろこれからデザインする自分たちのゲームで何を達成したいのか、ゲーム体験でプレイヤー間にどういう会話が生まれるとうれしいのか、プレイヤ

ーにどういう気づきを得てほしいのかというコアとなる目標だけをまずは決めてもらって。あとは何となく考えているゲームの動きを、紙をちぎっただけの雑なものでいいからやってみて、何かできそうだなと思ったら、できるだけ早くフィードバックをもらいに来てくださいという感じで、プロトタイピングのプロセスをかなり重視しています。
学生らのデモを見ながら「なんでこうしようと思った？」と一つ一つ確認しながらフィードバックし、学生はそのフィードバックを持ち帰ってまた作り直すということの繰り返しですね。どんどんごみがたまっていくみたいな、そういう状態をむしろウエルカムだと伝えて、その試行錯誤の記録は取っておいてねと。このやり方が今はうまくいっているので、このワークシートにそって決めていけばよいという道筋はほとんどつくっていません。
町支：ワークショップの知る活動、つくる活動という型は教えなきゃなと思っています。1年前や2年前の学年がつくったワークショップを紹介しながら、例えば、つくる活動はアイデアや作品をつくる活動で、その会のテーマについて考えるための時間でもある、とか、知る活動はそのつくる活動のための情報収集や共有の時間であるとか、説明しています。その型は一応守ってもらって、何でもいいよとはしていないです。
　それらを説明したうえで、型にのっとりながら進めるためのワークシートをつくっています。一段階目、知る活動として何をやるか、その次につくる活動として何をやるか、といったことを書けるワークシートです。
　とはいえ、型だけでは実際の流れは決まりません。試しにやってみたりすると分かりにくいところがたくさんあったり、改めて感じることもたくさんあります。それらをもとに考えて変えていく感じです。

興味関心やモチベーションの高め方

重田：つくる授業は、あらためて難しいなと思ったのですけれども。学ばせることが実はパラレルになっていて。私の授業でいうと、授業で元々設定していた知識・スキル、例えば情報検索とかをやるのですけど、もう一つ、チームなりグループで決めたテーマがあるわけですよね。テーマはいつもきちっと学ばないといけないのですよね。
　私の授業なんか、テーマは自由で。ある種テーマは材料だからと思っているのですけど、標葉先生の場合は、テーマはテーマでかなり重くてしっかりしたものだったりするので、そのテーマの捉え方が、テーマに関する知識が間違っていると、それはよそにも見せるものだから絶対駄目ということになるわけじゃないですか。でも、私、今日、自分の授業の反省ばかりしているのですけれども、そちらのほうがいいのかなと思いました。
　つまり、当然、テーマはまず材料で、ほんとはシラバスに書いた知識・スキルはこんなことがメインなので、テーマについては今回少し触れられてよかったですねということがあるのですけども。それだけだと、僕の言葉で言えば盛り上がりに欠けるところがあるのです。要は、材料は材料として知識・スキルを学んで、「よかったですね。こういうつくって語るというやり方もありでしょう。終了」みたいな感じで。
　もうちょっと話しちゃうのですけれども。うちの大学も授業評価アンケートがありまして。私の授業、おかげさまで比較的評価はいいのですけれども、幾つかある項目のうちに、毎回低いものがあるのですよ。それは何かというと、「学んだ内容についてさらに学びたいと思った」がいつも低いのですよ。
中澤：学生が興味関心を持てていないということですね。
重田：そう。それがテーマのことを言っているのか、授業で学んだ知識やスキルのことを言っているのかは分からないのですけど、いずれにせよ、授業で必要なことは学んだから、そこで終了となっている。
　その他の項目は高くて、大学ですごく評価される授業は、例えば北大での先生の研究を学んでみましょうというもので。それは、いわゆる自分がこれから進む分野について探索するタイプのアクティブラーニングの授業は、すごく人気があるのですよ。自分がその先に、大学の中の研究室に進むとか、そこまで見据えた上で、興味を持っているわけじゃないですか。だけど、私の授業って、そこである程度うまく学べて、授業の評価としては結構いいのですけど、終わりなんですよ。
　そこから先、情報社会のテーマについて、さらに学んでみようという人はあまりいないだろうし、ましてやID（インストラクショナル・デザイン）についてより学びたい人はいないわけなのですよ。だから、それがいいのかというのは結構悩んでいますね。
中澤：私の場合、教材や授業づくりは、「人に教える」行為を学生が行うのと同じだと考えています。そのため、駅までの道を尋ねられて答える時のように「人に教える」ことは身近にあり、大学生活でも職場でも様々な場所で生じうることだから、授業で学んだことを活かしてくださいと学生に伝えるようにしています。
重田：ある種の念押しというか。ここで終わらないと。
中澤：無駄ではないぞと。
重田：そうそう。

　座談会の内容をご紹介しましたが、いかがでしたか。書籍ではさらに多くの悩み・対処法、工夫が語られています。「つくることで学ぶ」授業だけでなく、アクティブラーニング型授業全般に共通する内容となっていますので、ぜひ書籍で確認してみてください。（中澤）

◆ 今後の活動予定

2024 年度 A セメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また、アクティブラーニングに関する定例のワークショップの開催も予定しています。授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト（https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/）で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。

（奥付）
〇発行年月日：2024 年 10 月 30 日
〇発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX 部門
若杉桂輔・中澤明子・中村長史
〇連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
〇Web サイト：https://komex-ex.c.u-tokyo.ac.jp/ja/